

男性の短期配偶戦略の抑止因 ―評判の効果に注目して―¹⁾

主査教員 堀毛一也

社会学研究科 社会心理学専攻 博士前期課程

新井田恵美

【問題】

ヒトをはじめ、全ての動物の生の究極の目的は、繁殖をすることである。ヒトの場合、自分の子どもを残すためには、異性と一時的な関係（短期配偶）あるいは長期的な配偶関係（長期配偶）を結ぶ必要がある。短期配偶についていえば、「浮気は男の甲斐性」という言葉が示唆するように、男性の方がその傾向が強いことが多くの研究で実証されている (Buss, 2012)。進化心理学では、この性差を潜在的繁殖速度 (Clutton-Brock & Vincent, 1991) における性差から説明する。潜在的繁殖速度とは、一回の繁殖から次の繁殖にとりかかるまでに要する潜在的な速さのことを指し、潜在的繁殖速度が速い性は遅い性に比べて、次の繁殖に速く取りかかることができるため、より多くの子どもを残すことが可能である。ヒトの場合、男性の方が女性よりも潜在的繁殖速度が速いため、短期配偶指向が強くなると説明される。

しかしながら、現実には、男性が常に短期配偶をおこなうわけではない。それにも関わらず、男性がなぜ、どのようなときに短期配偶を抑制するのかについては、ほとんど検討がなされていない。その理由としては、男性の短期配偶に伴うベネフィットにはばかり注目が集まり、コストには注目が集まらなかったためだと考えられる。つまり、実際には、男性が常に短期配偶をおこなうわけではなく、あくまでそれは短期配偶行動に伴うベネフィットとコストに依存し、短期配偶によるベネフィットがコストを上回るときには男性は短期配偶をおこなうものの、コストがベネフィットを上回るときには男性は短期配偶をおこなわないと予測できる。

男性の、短期配偶に伴うコストについてはいくつか考えられるが、その一つに、「女たらし」という評判が高まると、長期配偶相手として望ましい女性を得られなくなることが指摘されている (Buss, 2012)。もしこの指摘が正しいならば、男性は、女性からの評判が悪くなる恐れがあるときには、ないときに比べて、短期配偶を抑制すると考えられる。そこで本研究はこの仮説について実証的検討をおこなう。本研究の仮説は以下のとおりである。

仮説 1: 評判が顕現化していないときには、男性は女性に比べて短期配偶傾向を示すだろう。

仮説 2: ただし、評判が顕現化したときには、このような性差は減少するだろう。

【予備実験】

本研究では、Bateson et al. (2006) の研究に倣い、人の目の有無によって、異性からの評判の顕現性を操作することにした。そこで、本研究に先立ち、実験で使用する目を選定するための予備調査をおこなった。予備調査では、男女各 5 名ずつの目の写真を提示し、それぞれについて参加者に評価してもらった。そして、参加者がもっとも男性らしい（あるいは女性らしい）と判断した目の写真を採用した。

【実験 1】

実験では「大学生の恋愛観に関する研究」と説明し、選定した異性の目（評判顕現化条件）あるい

は花の写真（評判非顕現化条件）が入った質問紙をランダムに配布した。短期配偶指向は（1）社会的性指向性尺度（以下、SOI: Simpson & Gangestad, 1991）と（2）短期配偶の際に相手に求める基準（頭の良さ、優しさ、外見、年齢、異性との交遊関係）によって測定した。実験の結果、男性の方が女性よりも SOI 得点が高く、また相手に求める基準も低かった。すなわち、男性の方が短期配偶指向が強く、この結果は仮説 1 を支持するものであった。しかし、この傾向は評判の顕現性（目の有無）に関係なくみられており、仮説 2 は支持されなかった。仮説 2 が支持されなかった理由として（1）現在付き合っていない人はそもそも評判に対して敏感になる必要がないこと（2）実験が満員の教室で実施され、他者の目が顕現化しやすい状況であったため、評判の操作が弱かったことが考えられた。そこで、まず前者の可能性を検討するために、付き合っている人に限って再分析したところ、評判顕現化（目あり）条件では SOI 得点や相手に求める頭の良さ、優しさといった項目において予測したとおり、性差がみられなかった。この結果は仮説 2 を支持していた。ただし、年齢や異性の交友関係では仮説 2 を支持する結果は得られなかった。そこでもう一つの可能性（実験状況の問題）を検討するために、実験状況を改善し、再度実験をおこなうことにした。

【実験 2】

実験 2 では他の参加者により評判が顕現化しないように、参加者同士の距離をとっておこなった（それ以外の手続きは基本的に実験 1 と同じであった）。実験の結果、まず男性の方が女性よりも SOI 得点が高く、また相手に求める基準も低かった。この結果は、仮説 1 を支持していた。また、SOI 得点や年齢、異性関係の項目では、評判非顕現化（目なし）条件では男性の方が強い短期配偶指向を示していたが、評判顕現化（目あり）条件ではそのような性差はみられなかった。この結果は仮説 2 を支持していた。ただし、頭の良さや優しさでは仮説 2 を支持する結果は得られなかった。実験 2 では参加者同士の距離を工夫したものの、それでも他者がいる状況であり、他者がいない状況でおこなっている先行研究とは明らかに異なっていた。こうした実験状況によって評判の操作の効果が弱くになっていた可能性がある。

【考察】

本研究では想定したすべての従属変数で仮説を支持する結果は得られなかったものの、どの項目も、実験 1 あるいは 2 のいずれかで仮説を支持するパターンを示していた。先行研究では、男性の方が女性に比べて短期配偶指向が強いことが示されてきたが、本研究の結果は、常にそうした性差がみられるわけではなく、たとえば（女性の間で）悪い評判がたつような場合には、男性は短期配偶指向を抑制することを示している。このことは、女性が、男性の短期配偶に対して注意を払い、また評判をたてることで、対抗する可能性を示唆しているが、この点については今後検討が必要である。

【引用文献】

◆Bateson, Nettle, & Roberts, G. (2006) *Biology Letters*, **2**, 412-414. ◆Buss (2012) *Evolutionary Psychology: The new science of the mind* (4th Ed.). ◆Clutton-Brock & Vincent (1991) *Nature*, **351**, 58-60. ◆Simpson & Gangestad (1991) *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 870-883.

1) 本研究の一部は、日本グループ・ダイナミックス学会第 6 1 回大会で発表され、優秀学会発表賞

を受賞した（ロング・スピーチ部門）。